

侍兼山俳句会

第六百七十九回

世話人 山田安廣・鈴木輝子・寺岡翠・根来眞知子

東中乱・向井邦夫・森茉衣

令和五年十月十六日（月）

会場 大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木兵十郎・鈴木輝子・寺岡翠
東中乱・向井邦夫・森茉衣・山田安廣

投句者

植田真理・碓井遊子・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美
中村和江・西川盛雄・根来眞知子・東野太美子・平井瑛三

出席十一名+投句者十名 計二十一名

兼題

秋澄む・渡り鳥（幹三）新松子・秋祭（暁子）当季雜詠 通じて八句

次回

吟行 令和五年十月二十九日（住吉川両岸と海岸地域）
会場 魚崎西町会館會議室 午後一時～四時（出句〆切 午後二時）

次々回

例会 令和五年十一月二十日 締切 午後二時

兼題 神渡・木の葉（幹三） 小春・報恩講（暁子） 当季雜詠 通じて八句

選者吟

島一つ一つに名あり渡り鳥

町ごとに違ふ雛子や秋祭

柿はみな柿色となり奈良の昼

幹三

別人のごとき彼見る秋祭

平凡なわが町の秋かくも澄み

大空に撒かれしやうな渡り鳥

暁子

幹三

選

- 幼な児のふぐりゆるるや新松子 瑞三
- ◎渋滞のバスおおらかや秋祭
色褪し祖父の半纏秋祭り
- ◎磐座に向ひて二礼秋祭
- ◎海近く鶴の塚あり新松子 渡り鳥和食の国に降り立てり
- 秋澄むや水茎美しき文届く
音無くて車窓過ぎ行く秋祭
- 別人のごとき彼見る秋祭
何処にも刈り残したる曼殊沙華
- 土手駆ける野球少年新松子 邦夫
輝子
眞知子
- 秋澄むや空の下にて握り飯
旅はまだ続く干潟にわたりどり
そはそはと遠囃子にも秋祭
- 島を出る船の汽笛や渡り鳥
大阿蘇の明るき夜半を鳥渡る
秋祭お囃子山に響き合ふ
陵はやすらぎの地よわたりどり
大皿に料理揃へる秋祭

恵子	輝子	堯子	真理	堯子	暁子	安廣	兵十郎	和江	翠	瑛三
----	----	----	----	----	----	----	-----	----	---	----

幹三

特選句講評

- ・渋滞のバスおおらかや秋祭 翠
みんなが機嫌よい秋の一日。おだやかな日ざし、過ごし
やすい気温、まことにけつこう。ゆっくり通る地元の山
車が眼に浮かぶ。
- ・磐座に向ひて二礼秋祭 兵十郎
ご神体は巨岩。祭はこの厳かな神事から始まる。祭の賑
やかさを詠む句が多い中、祭の始発点に着目したのは面
白い。

・海近く鶴の塚あり新松子

輝子

おどろおどろしい古代の伝説と取り合わせたことで、新松子の青々とした若々しさが前に出てくる。海を臨む芦屋の松林、潮の香りもふつとよぎった。

・秋澄むや空の下にて握り飯

真理

人は皆、空の下に暮らしている。そのことを深く感じるが秋。気分よくおおらかに詠まれたことで季語が生きた。

・蔓引けばこぼれ落ちくる零余子かな

兵十郎

秋の野山に遊んだ日の野趣あふれる一句。夏の間に絡み合うように育つた草木にも、枯の季節が迫っている。零余子の色、一粒ずつの野性が思われた。

・秋祭なんば道行く鉦太鼓

輝子

読者それぞれに景が浮かんだことと思う。賑やかな祭が終わると村の農の仕事も一段落。静かな季節へ向かっていく。ノスタルジーをかきたてられた一句。

暁子

選

五十年住みて新入り秋祭

◎渋滞のバスおおらかや秋祭

新松子固き鱗の青さかな

昆陽の里大池うづめ渡り鳥

海近く鶴の塚あり新松子

八千草のいのち輝く写生帖

清秋や日課となりぬパン作り

◎見聞させし戦語れよ渡り鳥

秋氣澄む吸ひ込まれさう青き空

空澄みて金剛連山威儀正す

秋祭買うてもらへぬりんご飴

真二つの一刀石や秋澄めり

◎大地踏む足袋の白さや秋祭

秋澄む日行進曲の流れ来る

◎大阿蘇の明るき夜半を鳥渡る

母の胸の鼓動を確かむる夜長

旋回を重ね氣流へ鳥渡る

秋澄むや杖音響く美術館

だんじりの直角曲り秋祭

移民とも棄民とも言ひ新松子

兵十郎

翠

安廣

瑛三

輝子

遊子

翠

瑛三

翠

かな子

兵十郎

安廣

輝子

安廣

真理

遊子

翠

邦夫

兵十郎

◎ニュータウン迫力欠くも秋祭

浦風に青き増しゆく新松子

首傾げ内緒話か新松子

秋澄みて鋭角に見ゆビルの角

ビルとビル青い空間秋高し

翠

幹三

乱

安廣

茉衣

暁子 特選句講評

・渋滞のバスおおらかや秋祭

翠

祭りにつきものの車の渋滞。予め交通規制はされているのだろうが、田舎道などではお神輿が通る間、車やバスが待っていることがある。バスの乗客もお神輿ならばと文句を言わずに、共に祭りを楽しむ気持ちでいろいろせず待っている。「バスおおらかや」(旧仮名ならば「おほらか」という表現が面白い。季題の場合は出来るだけ送りかなをつけないので「祭り」の「り」はつけない。

・見聞させし戦語れよ渡り鳥

翠

季題「渡り鳥」は秋になると冬鳥が北国から日本に飛んでくるのをいう。昨今のロシアとウクライナ、また中東の悲惨な戦争を見たり聞いたりしてきた鳥たち、聞けるものなら聞かせて欲しいですね。

・大地踏む足袋の白さや秋祭

「足袋」は十二月の季題ですから季重なりということになります。しかしこの句の場合、足袋は暖をとるために使われているものではありません。従つて季題の役割を果たしていないと考えて、この句を選びました。

安廣

・大阿蘇の明るき夜半を鳥渡る

安廣

月光に照らされた阿蘇山の上を鳥が渡る雄大な夜の風景。

・ニュータウン迫力欠くも秋祭

翠

秋祭りは豊かな収穫を神に感謝する祭りであるから本来は農村や漁村で行われるものである。昔からの農村には立派なお神輿やだんじりがあり、伝統的な行事がおこなわれる。しかしそういうものがないニュータウンもお祭りに憧れ、新しい町作りのためにお祭りらしきものが計画される。勿論伝統の持つ「迫力」はない。けれど住民にとってはこれから伝統を築いてゆく楽しい行事だ。

互選三句

朱美選

担ぎ手の一の腕白し根津まつり

秋澄むや連隊を組むヘリの音

何処にも刈り残したる曼殊沙華

我が家の近くにも同じ光景が、気持ちは同じですね。

和江

邦夫

堺子

邦夫選

人の世のいくさ絶えざり鳥渡る

渋滞のバスおおらかや秋祭

浦風に青き増しゆく新松子

新松子は厳しい海風に耐えて益々強く元気に育ちゆく。

遊子

翠

幹三

恵子選

囃子来る動かぬ体秋祭

別人のごとき彼見る秋祭

丹念に刃を研ぐ音や秋澄めり

研ぐ音に集中、私は炉の火色に集中、同じ心です。

乱
暁子
幹三

言成選

何度でも見惚れる秋澄む空と雲

オリーブもレモンも碧い実青い空

海近く鶴の塚あり新松子

写生の効いた佳句である。

朱美
茉衣
輝子

堺子選

球体の一つ輝く月見酒

土手駆ける野球少年新松子

平凡なわが町の秋かくも澄み

変哲もない住み慣れた町に秋を発見した喜びが伝わる。

遊子
恵子
暁子

かな子選

秋澄むや水琴窟の一零

母の胸の鼓動を確かむる夜長

真理
幹三

どの柿も柿色となり奈良の昼

どの柿も柿色となり・が良い。秋の奈良への郷愁。

和江選

空澄みて金剛連山威儀正す

秋澄むや杖音響く美術館

秋祭鉢巻のまま睡りし子

微笑ましい風景。吾子の充実した一日を活写。

翠
暁子

和江選

光芒は踏絵の島の秋落暉

盛雄
茉衣
暁子

オリーブもレモンも碧い実青い空

平凡なわが町の秋かくも澄み

いつもの同じ町なのにはつと気づいた秋の気配に共鳴。

かな子選

秋澄むや水琴窟の一零

母の胸の鼓動を確かむる夜長

真理
幹三

どの柿も柿色となり奈良の昼

どの柿も柿色となり・が良い。秋の奈良への郷愁。

太美子 選

秋澄むや水琴窟の一零

堯子

大空に撒かれしやうな渡り鳥

暁子

太鼓打つ腕舞ひに舞ふ秋祭

安廣

中七で太鼓の棒捌きの美と佳境に入つてゐる事を表現。

輝子 選

色褪し祖父の半纏秋祭り

和江

秋祭鉢巻のまま睡りし子

暁子

鯛野菜禰宜の拝する秋祭

乱

夏祭ではなく収穫を祝う秋祭の様子を端的に詠まれた。

兵十郎 選

渋滞のバスおおらかや秋祭

翠

旅はまだ続く干潟にわたりどり

輝子

島一つ一つに名あり鳥渡る

幹三

渡り鳥にとつて島一つ一つが名のある大切な道標。

茉衣 選

大地踏む足袋の白さや秋祭り

安廣

秋澄むや杖音響く美術館

翠

見聞せし戦さ語れよ渡り鳥

翠

航空機の飛べない空を飛んでメディアに出ない事知りたい。

眞知子 選

だんじりの直角曲り秋祭

邦夫

大地踏む足袋の白さや秋祭

安廣

渋滞のバスおおらかや秋祭

翠

日常の中に迷い込んだような祭りと出会つた喜び。

真理 選

太鼓打つ腕舞ひに舞ふ秋祭

安廣

秋澄むや杖音響く美術館

翠

秋澄むや水琴窟の一零

堯子

水琴窟の茫漠とした音色が聞こえるようです。

翠 選

服役の少年見上ぐ渡り鳥

幹三

地震の碑に淡き蔭置く新松子

輝子

人の世のいくさ絶えざり鳥渡る

遊子

世界のあちこちで戦争が。鳥だけが自由で、平和だ。

盛雄 選

鯛野菜禰宜の拝する秋祭

乱

満月や消したきほどのビル明かり

堯子

大地踏む足袋の白さや秋祭

安廣

秋祭の様子を足元の足袋の白さで見事に表現している。

安廣 選

蔓引けばこぼれ落ち来る零余子かな

兵十郎

服役の少年見上ぐ渡り鳥

幹三

秋澄むや水琴窟の一雫

堯子

秋の空と水琴窟の音の透明感が響き合っている。

遊子 選

島一つ一つに名あり鳥渡る

幹三

移民とも棄民とも言ひ新松子

幹三

色褪せし祖父の半纏秋祭り

和江

祭りに参加の老身の氣概が伝わつてくる一句。

乱 選

八千草のいのち輝く写生帖

遊子

新松子固き鱗の青きかな

安廣

別人のごとき彼見る秋祭

暁子

祭のあるハレの日、予期せぬ彼の姿に床しくも驚く。

安廣

八千草のいのち輝く写生帖

新松子固き鱗の青きかな

別人のごとき彼見る秋祭

祭のあるハレの日、予期せぬ彼の姿に床しくも驚く。

安廣

参加者自選句

かけて来る孫の手の中新松子

朱美

病室に流れ来元氣秋祭

瑛三

秋澄むやフオトウエディングに幸溢れ

和江

秋祭買ふてもらへぬりんご飴

かな子

秋澄める大大阪のパノラマ台

邦夫

親転勤子も北からの渡り鳥

恵子

庭桜揺れ背景の秋澄める

言成

秋澄むや水琴窟の一雫

堯子

小鳥来る主はけふも外出して

茉衣

旅はまだ続く干潟にわたりどり

兵十郎

真二つの一刀石や秋澄めり

輝子

だし抜けに不意を笑かれた秋の声

太美子

空高しゆつくり回る観覧車

眞知子

母の胸の鼓動を確かむる夜長

翠

秋澄むや杖音響く美術館

真理

光芒は踏絵の島の秋落暉

盛雄

大地踏む足袋の白さや秋祭

遊子

旋回を重ね氣流へ鳥渡る

安廣

新松子蔭の二人も頬寄せて

ひとゝと

山田安廣

お知らせ

漸く秋らしくなつて参りました。今回は Google フォームを用いた会報編集外注の初めてのテスト・本番を実施させて頂きました。皆様方のご理解とご熱心なご協力、それに編集を引き受けて頂いた久次米様のお力添えによつて、何とかゴールにたどり着けそうです。ご協力頂きました皆様方、本当に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

句会終了後、短時間でしたが、即吟をいたしました。

卓上に置かれた、枝付きの小さな渋柿と、お皿に入れた零余子が題材です。選はせずに、それぞれ自分の句を披露いたしました。

愛らしき豆柿渋さ秘めてをり

暁子

豆柿や網掛の手間免るる

邦夫

柿の実の端（へた）吐き出して鳥かな

堯子

てのひらに包む豆柿日の匂

輝子

豆柿や師を偲びゐる庭の景

兵十郎

柿の実の色に染まりて幸せに

茉衣

ひと粒づつ野性の違ふ零余子かな

幹三

渋柿や手間ひま要す才能も

翠

渋柿を切れば亀虫ついて来し

安廣

十月二十九日（日）は吟行です。すでに配布いたしました案内書通り実施予定です。皆様のご参加をお待ちしております。

担当…森 茉衣

吟行地

神戸市東灘区の住吉川両岸と海岸地域

（阪神魚崎・六甲ライナー魚崎・JR住吉）

倚松庵（「細雪」の家）・櫻宴（櫻正宗記念館）・浜福鶴 等

句会場

魚崎西町会館 会議室

（魚崎西町四丁目 ○七八一八四二一一八三五）

出句 午後二時締切 八句